

A General Survey of The Second Language Teaching at Toyohashi University of Technology

Yoshio Oro
Shoji Hamajima

Toyohashi University of Technology has held a Foreign Language Education Symposium three times since 1984. The participants were teachers of foreign languages, chiefly English and German, who belong to our university and technological colleges. At the first symposium, the discussion was mainly focussed on the general problems of teaching English and German. At the second, discussion was limited to the problems of teaching English. At the third, problems concerned solely with the teaching of German. Details of the first two symposiums were given in the Language Centre Newsletter of 1984 and 1985 editions.

In this paper, the result of survey of German Teaching will be observed. One purpose of doing this survey was to acquire information necessary to be discussed between TUT and technological colleges at the Third Foreign Language Education Symposium held on November 7-8, 1986. Another purpose was to make effective use of the result to assist the class work of teachers of German.

After World War II, English rapidly became the common, international language. Students are not as interested in German as they used to be. Students of technological colleges and universities especially tend to be rather poor at learning languages than at technical subjects. Because of this, it is very significant to make a survey of teachers' ideas and opinions on the teaching of German.

This paper is mainly divided into two parts: the results of the survey given to all the teachers at TUT and its analysis, and the results of the survey given to the teachers of German at technological colleges and its analysis.

Generally speaking, TUT teachers possess as well-balanced opinions on German education as they do on English education. They stress the necessity of teaching German as a means of enriching students' cultural knowledge.

Teachers of German at Technological colleges cite a number of problems of teaching German in spite of their great efforts in producing new teaching materials.

It is to be concluded that the educational system has to be changed to arouse and motivate students' interest in learning German at technological colleges.

第二外国語(ドイツ語・フランス語)教育に関するアンケート

大 呂 義 雄
浜 島 昭 二

まえがき

本学語学センターでは、昭和59年11月に技科大及び高専に於ける外国語教育の諸問題を話し合う第一回のシンポジウムをおこなった。第一回及び翌年の第二回においては主として英語教育をテーマとした。昭和61年度の第三回では第二外国語(主としてドイツ語)教育について話し合った。今日、第二外国語教育を問題にする場合には、先ず、英語が国際流通言語として確立され、急速な技術の進歩に対応すべく教育の効率化が求められている状況のなかで、その今日的な意義が問い直されているという事実を認識しなければならない。従って今回のシンポジウムでは、この問題を一つの柱とし、そのための資料を得るべく本学教官に対してアンケート調査を実施した(Part 1)。

教える側としてもこの問題を避けて通ることができない。そこから既に教育内容及び教育方法を再検討する必要性が生じている。これをシンポジウムの第二の柱とし、高専に於ける第二外国語教育の現状と教官の問題意識をアンケートにより調査して、話し合いの資料とした(Part 2)。

—Part 1—

調査対象：豊橋技術科学大学教官

対象者数：164名

回答者数：105名

回収率：64%

アンケートの集計と設問の意図説明および解釈

1. 所属

設問の第一に所属を聞いたのは以後の回答に何々型発想なるものが存在するのか見てみたかったからである。しかし、これは回収が系、センター別に行なわれたので、協力していただいた運営委員を確認すれば自ら明らかになることであった。

2. 氏名

これについては今後参考になるような意見があった時に、更にそれを詳細に知りたいといった場合に連絡をとることができるよう記入を依頼したが、検討段階で運営委員の中から無記名の方がよいという意見が有り、自由記入とした。しかし、実際には無記名は例外的に少数であった。

3. 年齢

これについては、設問の10-1、第二外国語の必要・不必要に年齢的な傾向が出るかも知れない、と予想して設問に加えたが、その結果については後記する。

4. 教職経験年数

回答の傾向と相関が有るかどうかわかりようとして設問に加えたが、相関は見出すことができなかった。

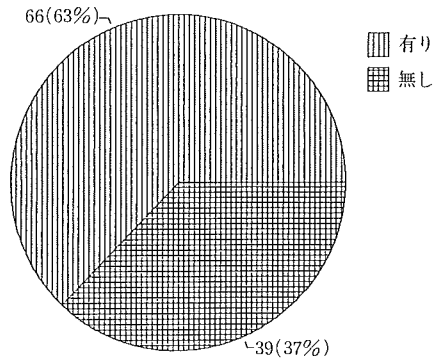
5. 企業に於ける在職経験の有無

上記の設問と同様に特定の傾向を決定する要因となるのではないかと予想したが、結果的にはそのような要因とはなり得えなかった。

6. 海外滞在経験

イ～ホを通して、英語圏以外にある程度長期に滞在し、当該国の言語を使って生活し、しかも一定以上のレベルに達している者がどの程度おり、そういう人たちが第二外国語に対し、どのように考えているかを知りたいことを意図した。

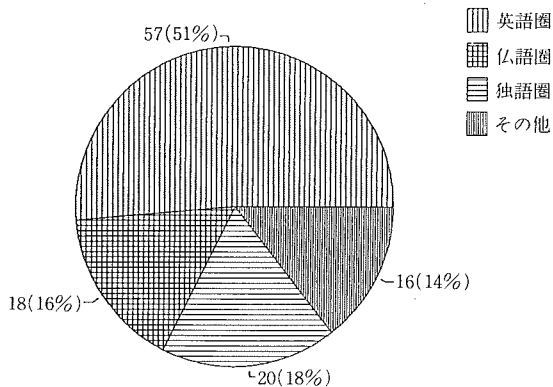
イ. 経験の有無



ロ. 滞在期間

3ヶ月未満	6ヶ月未満	1年未満	1年以上	2年以上	3年以上	無回答
8名	6名	7名	22名	12名	9名	2名

ハ. 滞在した外国語圏（回答は複数になるのでイの数とは一致しない。）



ニ. 英語圏以外での主たるコミュニケーション言語

1. 英語：30名（延べ）
2. 当該国の言語：12名（延べ）

回答者の内、仏語圏および独語圏に滞在しながら主に英語によってコミュニケーションを図っていたのは延べ20名、各々仏語、独語を使っていたのは延べ11名であった。これらの者は全て次の7の設問に対し第二外国語として独語を学習したと答えているから、仏語圏滞在者を除外すると、独語圏に滞在し、英語を使っていた者は12名、独語を使った者は6名である。後者には更に露語を第二外国語として学習し、ソビエトで露語を使った者が1名付け加えられる。上記ハの独語圏滞在経験者20名の内、2名はニに対し、英語と答えているのでここでは除外した。

ホ. 滞在先での言語生活の様子

これ自体に特別の意味はなく、英語以外の言語の習熟度、更にはそれと第二外国語教育に対する意見との相関を見ようとするものである。しかし、ニとホが一連の設問であることが、やや不明確であったため、英語の習熟度も表明される結果になった。ただし、回答がすべて主観的な自己評価であるのは、アンケートという性格上止むを得ない。

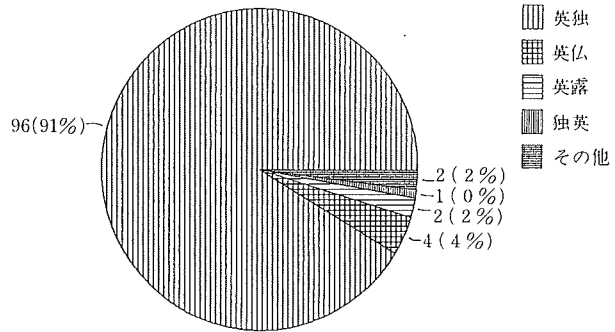
- a) ハに対し1（英語圏）と答え、ホに対し
 - A（最初から全く問題がなかった。） 3名
 - B（最初苦勞したが、次第に慣れた。） 19名
 - C（最初から最後まで苦勞した。） 7名
- b) ハに対し2, 3&4で答え、ニに対し1と答え、ホに対し
 - Aと答えた者 3名
 - Bと答えた者 9名
 - Cと答えた者 8名
- c) ハに対し2, 3&4で答え、ニに対し2と答え、ホに対し
 - Aと答えた者 2名
 - Bと答えた者 7名
 - Cと答えた者 3名

即ち、12名中9名は英語以外の言語をある程度満足のいく段階までマスターしたと自己評価していると言うことができる。

7. 外国語学習経験

A 第一・第二外国語の組み合わせ

- 英・独：96名
- 英・仏：4名
- 英・露：2名
- 独・英：1名
- その他：2名



この設問はこれ自体に意味がある訳ではなく、上の6の背景情報であると共に、学習者としての経験を思い出しながら、以下の設問に答えてもらう心理的準備の役割を担っている。

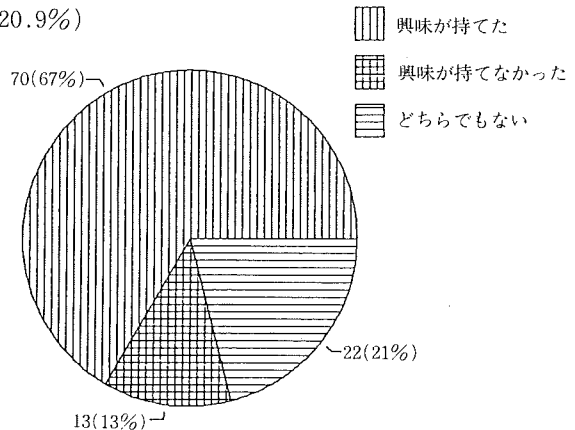
B その他の学習経験(延べ数)

- | | |
|------------------------------|------------|
| フランス語：15名 | ハングル語：2名 |
| ロシア語：8名 | ギリシャ語：2名 |
| 中国語：3名 | イタリア語：2名 |
| スペイン語：3名 | ドイツ語：2名 |
| ラテン語：3名 | スウェーデン語：2名 |
| エスペラント、ポルトガル、アイルランド、オランダ：各1名 | |
| なし：66名 | |

8. 外国語の学習について

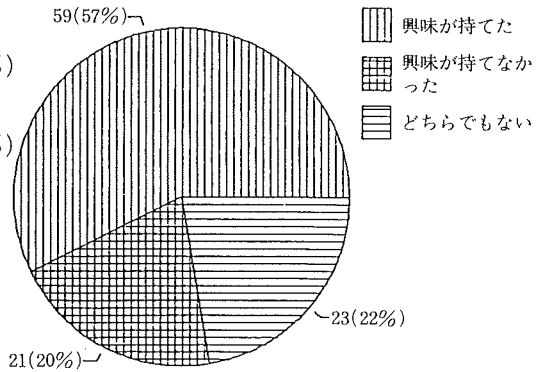
イ. 第一外国語の学習は

- A 興味が持てた。 70名 (66.7%)
- B 興味が持てなかった。 13名 (12.4%)
- C どちらでもない。 22名 (20.9%)



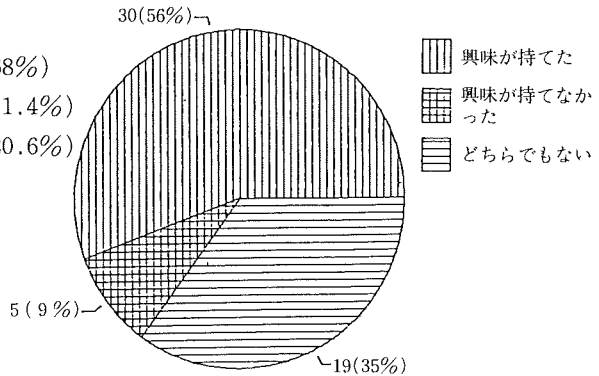
ロ. 第二外国語の学習は

- A 興味を持てた。 59名 (56.2%)
- B 興味を持てなかった。 21名 (20%)
- C どちらでもない。 23名 (23.7%)



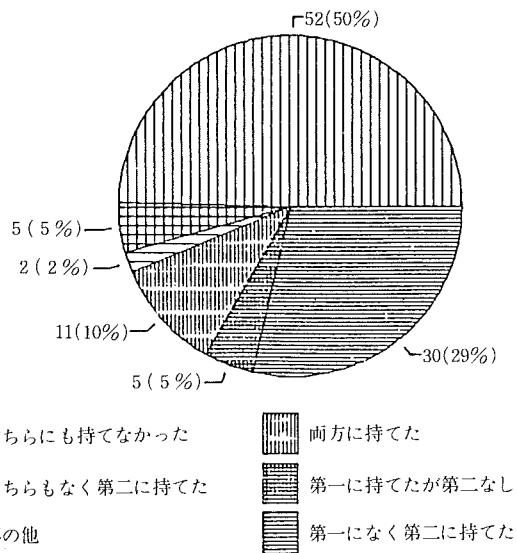
ハ-1. その他の外国語の学習は

- A 興味を持てた。 30名 (68%)
- B 興味を持てなかった。 5名 (11.4%)
- C どちらでもない。 19名 (20.6%)



ハ-2. (ハ-1) について第一外国語 (殆ど英語) にも興味をもてた者、もてなかった者 etc. の相関を調べてみるとつぎの通りであった。

- A. 第一外国語, 第二外国語のどちらにも興味を持てた: 52名 (49.5%)
- B. 第一には興味を持てたが, 第二には興味を持てなかった: 5名 (4.8%)
- C. 第一には興味を持てなかったが, 第二には興味を持てた: 2名 (1.9%)
- D. 第一はどちらでもないが, 第二には興味を持てた: 5名 (4.8%)
- E. どちらにも興味を持てなかった: 11名 (10.5%)
- F. その他: 30名 (25.6%)

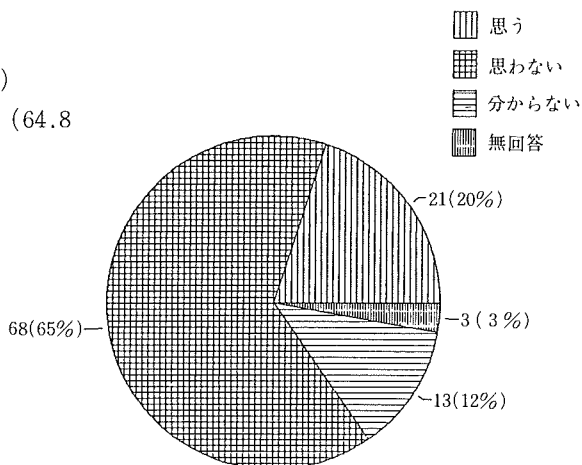


このことから約半数が、両方の外国語に対し興味を持てたと答えていることが分かり、どちらか一方ということはない。つまり、学習する外国語の数の問題ではなく、英語に対して学習意欲を持っていない者はそれ以外の言語にも学習意欲を持たないことになる。逆に言えば、外国語の学習を英語に限定しても、それはその学習に対する意欲を高めることにはならない。

9. 第二外国語について

イ. 身に付いたか

- A. 身についたと思う：21名 (20%)
- B. 身についたとは思わない：68名 (64.8%)
- C. 分からない：13名 (12.4%)
- D. 無回答：3名 (2.8%)

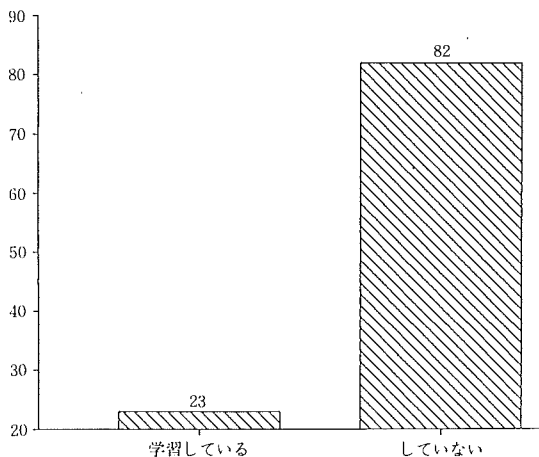


これ自体は、実はかなり難しい問題であって、直接的な「学習」の終了後に、どの程度使う機会があるかによって、学習した事の定着率が決定的に影響を受ける。

英語についても、大学学部終了時点での成果を問えば、同様の結果がでてくるのではないか。

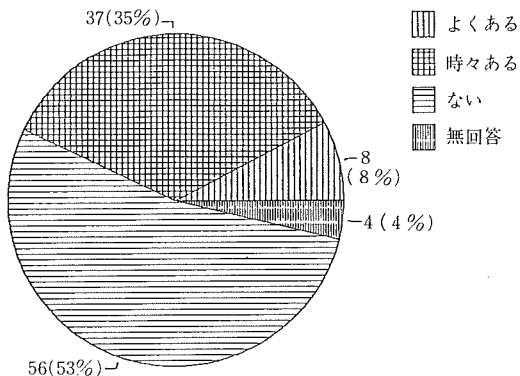
ロ. 第二外国語の継続学習について

- A. 小説, 雑誌, 等を読む：5名
- B. テレビ, ラジオの語学講座：10名
- C. 市販のビデオ・オーディオ：4名
- D. 語学学校：2名
- E. その他：6名 (専門に関する文献を読む, 機会あるごとに使う)



ハ. 現在使用する機会があるか

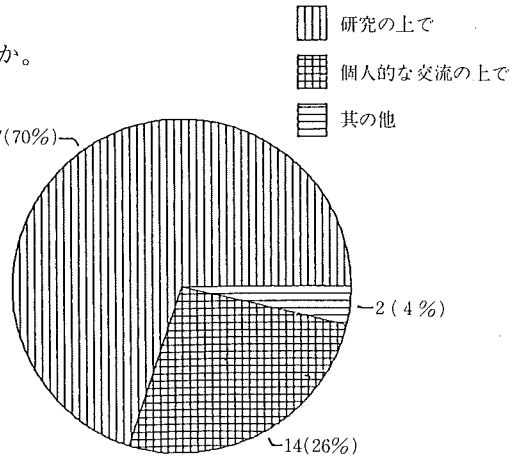
- A. よく有る：8名 (7.6%)
- B. 時々有る：37名 (35.2%)
- C. 無い：56名 (53.3%)
- D. 無回答：4名 (3.9%)



[良く有る]と[時々有る]とを合計して、なんらかの形で使用する機会の有る者は45名(42.8%)である。

ニ. どのような場合にその外国語を使用するか。

- A. 研究の上で: 37名 (70%)
- B. 個人的交流の上で: 14名 (26.4%)
- C. その他: 2名 (3.6%)

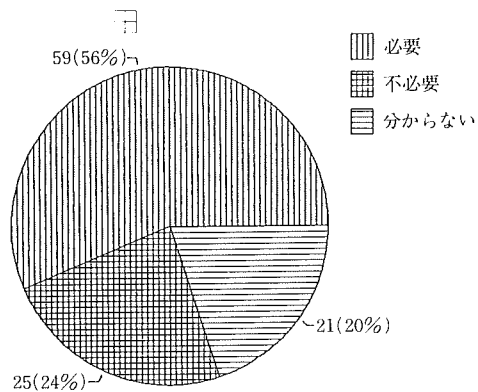


この質問は複数回答なので、総数は延べ数である。

11. 第二外国語について

1. 理工系の高等教育機関において第二外国語は必要か

- A. 必要である: 59名 (56.2%)
- B. 不必要である: 25名 (23.8%)
- C. 分からない: 21名 (20.0%)



1-a. この問題について年齢との相関を見てみると

20代

- A. 必要: 66.7%
- B. 不必要: 11%
- C. 分からない: 22.3%

30代

- A. 必要: 52.8%
- B. 不必要: 25%
- C. 分からない: 22.2%

40代

- A. 必要: 46.7%
- B. 不必要: 30%
- C. 分からない: 23.3%

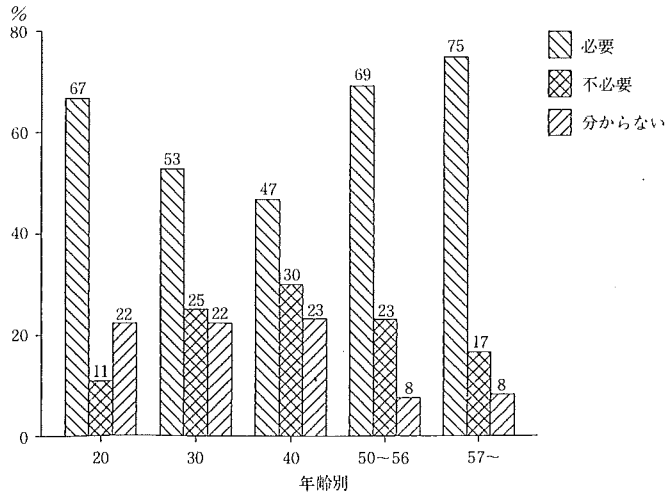
50-56歳代

- A. 必要: 69.2%
- B. 不必要: 23.1%
- C. 分からない: 7.6%

57歳以上

- A. 必要: 75%
- B. 不必要: 16.7%
- C. 分からない: 8.3%

第二外国語(ドイツ語・フランス語)教育に関するアンケート



これをもって直ちに統計的に年齢別の傾向を読み取るのは、サンプルの数から言って多少無理があろうが、ここで得られた数値からだけ言えば、[必要]という意見については20代と50代以上が近い値を示し、57歳以上、つまり旧制の学校教育を受けたグループが際立って高い値を示している。それに対し30代、40代では[必要]と言う意見は比較的少なく、20代も含めて50代以上と比較すると、[分からない]と言う回答が多い。

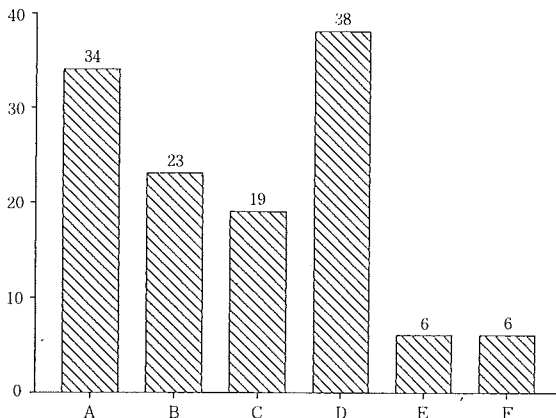
1-b. また同じ問題と海外滞在経験の有無との相関を見てみたが、顕著な傾向は認められなかった。

1-c. 同様に1-6により、英語以外の言語を実際に使った経験を有する者が、この点に関してどのように考えているかを見てみたが、サンプル数が12名と少ないために、統計的な意味は持ち得ない。参考までに、数値を挙げておくと次の通りである。

A. 必要：7名 B. 不必要：2名 C. 分からない：3名

2-1. 第二外国語が必要な理由

A. 34名 B. 23名 C. 19名 D. 38名 E. 6名 F. 6名



Fの例：語学のセンスを身につける。

人間の幅が広がる。

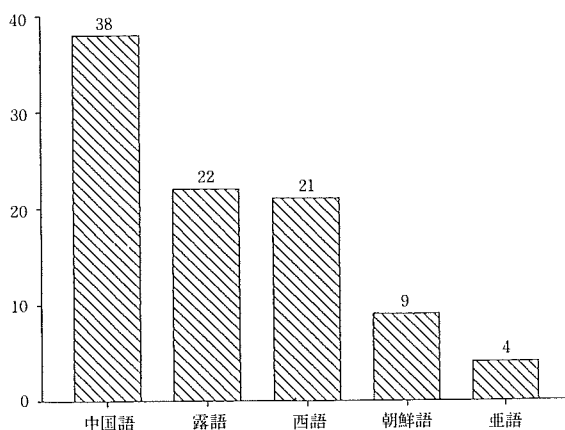
論理的試行の訓練, etc.

2-2. ドイツ語、フランス語以外に開講した方がよい言語

記入有り：43名 無し：16名

外国語名

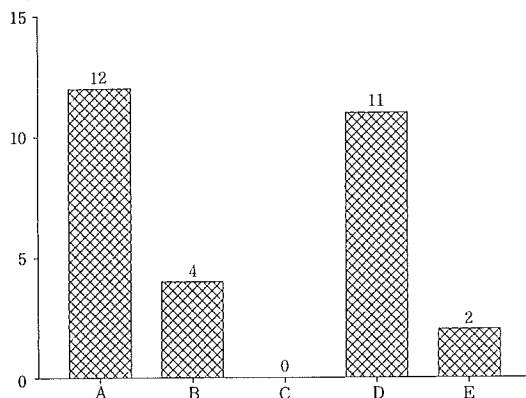
中国語 : 38名
 ロシア語 : 22名
 スペイン語 : 21名
 ハングル語 : 9名
 アラビア語 : 4名



これはハングル語を除いて、61年までに語学センターが夏期集中講座で開講した言語と一致している。

3. 第二外国語が必要な理由 (複数回答があるため10-1-bとは回答数が一致しない。)

A. 12名 B. 4名 C. 0名 D. 11名 E. 2名

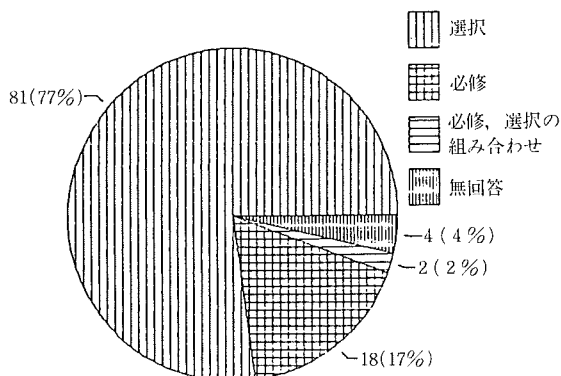


Eの例：英語が身に付けば他の外国語は比較的僅かな努力で身につけることができるから先ず英語が先。

第二外国語よりも他の講義、研究等に時間を配分すべきである。

4. 履修形態について

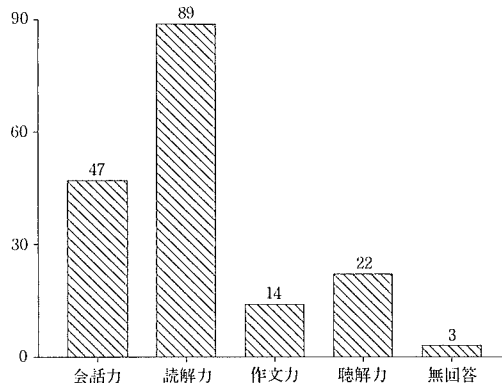
A. 必修：18名 (17%)
 B. 選択：81名 (77%)
 C. 必修選択の組み合わせ：2名 (2%)
 D. 無回答：4名 (4%)



履修形態については選択にする方がよいという意見が圧倒的に多い。必修・選択の組み合わせという意見は選択肢の中に挙げておかなかったにも拘らず出されたもので、この項目に挙げておけば、実際にはもっと多くなることが予想される。設問の出し方が不十分であったことは、今後のアンケート作成上の反省としたい。

5. 身に付けるべき技能

- A. 会話力：47名
- B. 読解力：89名
- C. 作文力：14名
- D. 聴解力：22名
- E. 無回答：3名



会話、読解力の比率はほぼ1：2で、この傾向は系・センター別に見ても同様であるが、3・4系、特に4系ではほぼ1：1である。

読解力重視の考え方は、[研究の上で第二外国語を使用する機会がある]とI-9で答えている37名の2倍以上が表明しており、[専門文献を読む]ことを一義的な目的としてきた我が国の(第二)外国語教育の有り方を反映している。それは即ち[読む物]がなければ学習する必要も無くなるということであり、このこと自体、問題であろう。それが問題として回答者の少なからざる部分に意識されているということが、[会話力を身に付けさせるべきである]という意見に反映してきている。

6. 履修単位

提案の上位だけを挙げると

選択	4単位：18名	必修	2単位：5名
	2単位：11名		4単位：3名
	3単位：8名		

必修2単位／選択2単位：5名

その他、選択1単位から同8単位まで、多数の組み合わせの意見があり、設問の不的確さの故もあって集計は困難であったが、何らかの形で必修とする意見は28名、選択のみとする意見は48名で、後者の意見が63%を占めた。これは4における同傾向の結果81%の、補足修正と見ることができよう。

[自由意見]

- 研究には必要ないが、教養として学んでいた方がよい。
- 一般論としては必要と思うが、本学学生には先ず英語力をつけさせるべきである。(数名)
- 教養的色彩が強いから、他の人文科学、社会科学と交替可能な選択科目とするのがよい。
- 選択科目として開講はしておく。(数名)

- 科学技術上の知識吸収にはドイツ語は不要であるが、異文化感覚を養い、情報発信のために要ると考えた方がよい。
- 中国語を早急に開講すべきである。
- 大学院進学者は初歩を知っていたほうがよい。
- 第二外国語の選択は専門教官がアドバイスすべきである。
- 将来必要になった時のことを考えて、自分で勉強するための基礎を作っておくべきである。
- 読解力重視（数名）
- 大学生が英語しか学ばずアメリカ文化以外の異文化を理解しようとしなくなった時のことを思うとぞっとする。
- 英会話にもっと時間を割くべきである。（教職員のための英会話教室を開いて欲しい。）
- 規範的な文法にかんする知識、簡単な文が書ける、平明な文が読めることを目標とすべきである。
- 英語力、国語力が不足しているので、第二外国語の代わりに現代国語を課し、論理的文章を書く練習をさせた方がよい。
- 会話を重視すべきである。
- 健全な精神の持ち主として英語圏以外の国の文化、生活、芸術、宗教などについて知ることは重要である。第二外国語軽視には、人間を道具として見る人間性無視の考え方が含まれており危険である。
- 独、仏語は読解力を、中国、スペイン語は会話力を重視せよ。
- 第二外国語の時間を英語にあてたところでレベルアップは期待できない。
- 即効、実用性、技術偏重の面からの英語のみ重視の考え方は問題である。
- 第二外国語の種類を増加すべきである。
- 第一、第二という区分を廃止し、学生の選択に任せる。

—Part 2—

調査対象：高等専門学校第二外国語担当教官

対象校数：62校

回答校数：36校（回収率58%）

回答者数：53名

集計結果と説明及び解釈

I. 回答者自身について

1. 年齢, 2. 教職経験年数については省略, 3. 正・副担当科目, 4. 専攻

3-1 ドイツ語を主に担当：29名

専攻内訳 ドイツ語・ドイツ文学：22名

哲学・倫理学：4名

その他：3名

注) その他の例：西洋古典学, ドイツ政治史, 教育史

3-2 ドイツ語を兼任：16名

主担当内訳 英語：2名

哲学・倫理学：8名

その他：6名

注) その他の例：歴史, 政治・経済, 倫理・社会, 哲学

3-3 フランス語を主に担当：1名

専攻：倫理学

3-4 ロシア語を兼任：1名

専攻：工学

3-5 説明

これは第二外国語担当者の中に本来ドイツ語やフランス語あるいはロシア語を専攻としない者が少なくないので、その実態を知ることが目的とした。しかし専攻は言語教育担当者としての competence とは関係がない。そもそも日本の大学では外国語を専攻してもそれは言語学や文学を専攻するのであって、その言語を教育する専門家として養成されるのではない。

II. 授業時間数, 専任・非常勤講師の担当割合, 単位数, 受講者数

これらの設問に対しては、回答方法の指示が明確でなかった為に、集計可能な統一的回答が得

られなかったので、結果の報告は省略する。これに関してはしかし沼津高専の堀米教授による日本独文学会ドイツ語教育部会の調査があるので、ドイツ語については詳しい情報を得ることができる（「高等専門学校ドイツ語担当者名簿」参照）。この資料は前記I-3の問いに対してもより詳細な情報を与えてくれる。

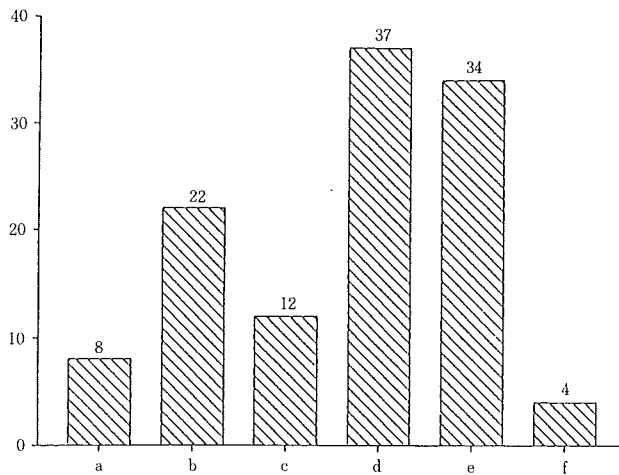
III. 授業について

1. 目的・目標

回答は以下の選択肢から選び、複数回答の場合は優先順位をつける。

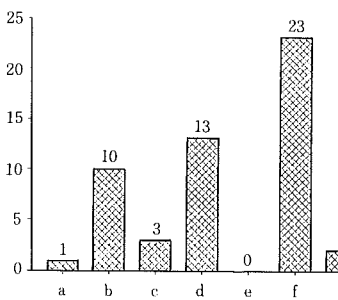
- a. 専門書を読む
- b. 一般書（含新聞・雑誌）を読む
- c. 会話をする
- d. 異文化に触れる
- e. 英語学習の補助
- f. 一般教養としての学習経験をする
- g. その他

1-1 頻度

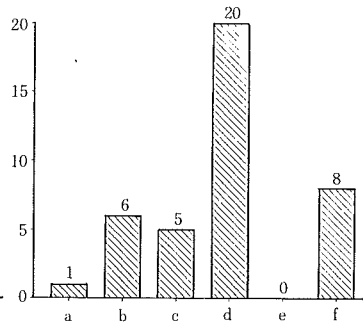


1-2 順位別頻度

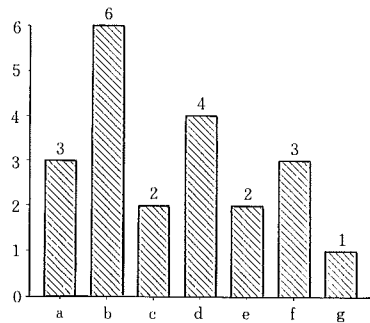
1位



2位



3位



注) g の例：文法を理解する。

- ・言語の多様性を体得する。
- ・言語間における論理構造や思考過程の異同を理解する。
- ・バランスのとれた基礎学力を持つ。

1-3 説明と解釈

集計で明らかのように第二外国語学習の目的として最も頻繁に1位に挙げられているのはfで、1位2位に計31回挙げられている。次に多く1位に挙げられているのはdで、2位に挙げられている回数を合計すると33で、fよりも多い。そしてこの2つが他を圧して多数であるのは第二外国語(ここではドイツ語)が文化や技術の輸入の為の補助手段であることをやめた、という公然の事実の認識が反映していると考えることができよう。このことは次に多く挙げられているbにも現われている。つまり「読む」能力の修得を目的としながらその対象は専門文献ではない。aは1位・2位には各々1回挙げられているだけである。ならば圧倒的に多いdやfは内容的に或る程度共通の理解が得られているかという、そこの所が極めて曖昧である。アンケートという性格上答を類型化せざるを得ず、個々の回答者が考えていることを詳細に聞き出すことはできなかったが、議論を深めたい問題である。類型だけでは不充分と見なす回答者がgに記入していると考えることができようが、それも含めてテキスト選定から授業内容・方法にまで関わる根本問題が、少なくとも個々の教官において意識的に検討課題として捉えられているかが問題である。

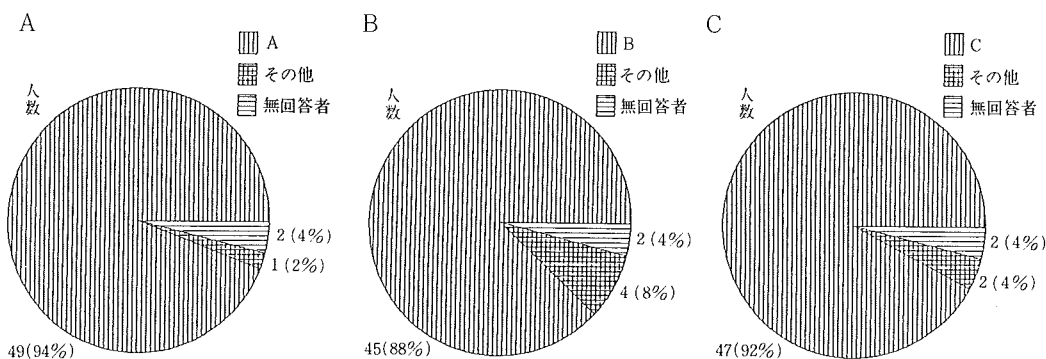
cはaよりも多く挙げられており、コミュニケーションに重きを置く最近の流れを反映していると思われるが、bよりも少ない。これは日本では実際に使うことはまずないだろうという状況によるものであろうが、後のIII-3で31名がオーディオ・テープを教材として使っているという回答との関連において考えてみると、音声の導入が直接的には会話の養成という目的とは結びついていないことがわかる。

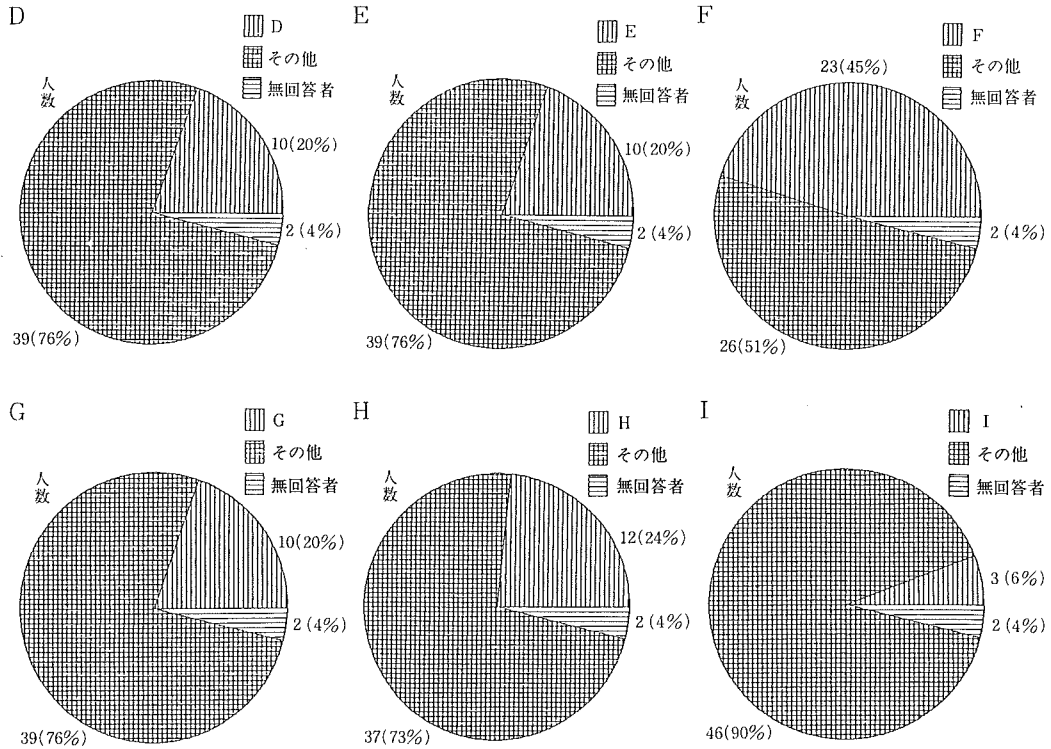
2. 授業の進め方

回答は以下の項目からの選択・組み合わせによって求めた。

- A：文法説明 B：文法練習(pattern practice) C：音読 D：聴解
 E：単文翻訳(両方向) F：長文和訳 G：暗唱 H：(当該言語による) Q & A 練習
 I：モデル会話の暗記・再現 J：その他 K：その他

2-1 頻度(回答数51, 無回答2)





2-2 説明と解釈

2-2-1 A・B・Cが大半の授業で行なわれているのは普通であり、これを授業の最初に行なっているのは36名(71%)

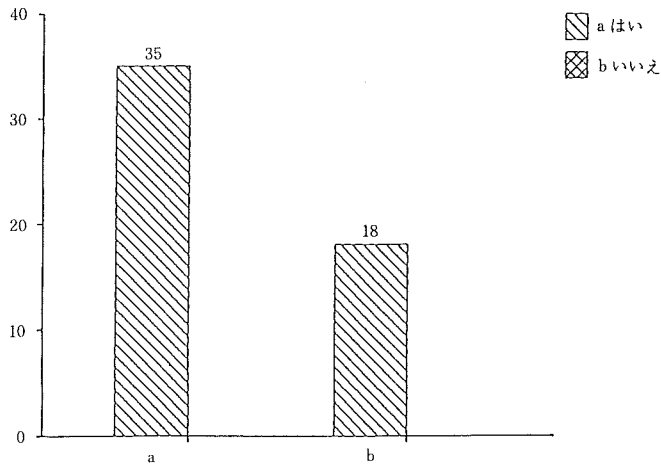
2-2-2 A・Bの前にテキスト理解に関わる作業が行なわれているのは6例あり(うち1例はA・Bを行っていない), D, E, H, I, K(ビデオ)である。Dを最初に行なっているのは2名。

2-2-3 EまたはFの数値はグラフの如くであるが、何らかの形で翻訳を行なっているのは42名(82%)である。これが授業の中でどの程度の比重を占めているかは知ることができないが、翻訳をレッスン毎の最終段階とする授業法に対する批判も強くあり、議論の必要があろう。翻訳を行っていないのは9名である。

2-2-4 D, I, G, HもしくはJ・Kで音声を取り入れているのは18名で、そのうちⅢ-1でCを目的として挙げているのは7名である。またⅢ-4でオーディオ・テープを教材として使っているという回答は31名がしているが、この数値上の差は、テープが授業の中では直接使われていないことを表わしているのであろう。

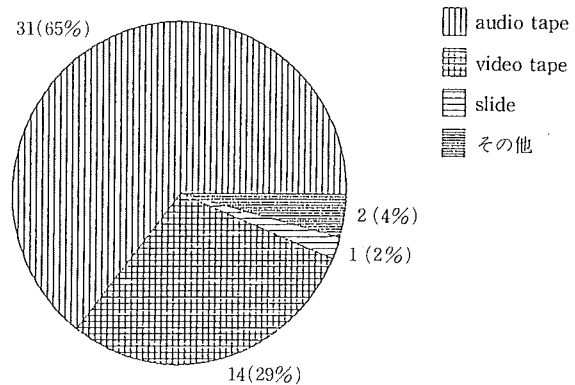
2-2-5 J又はKの例: 作文, 書取り, 歌, ビデオ, 語句の説明と発音練習。最後のものは本来項目として挙げられていなければならないもので、回答はもっと多かつたであろうと考えられる。

3. 視聴覚教材の使用



4. 視聴覚教材の種類と内容

- a. オーディオテープ
- b. ビデオテープ
- c. スライド
- d. ビデオディスク
- e. その他



4-1 教材の内容

- a: テキストの吹き込み
聞きとり
歌
pattern practice
発音
会話
- b: テレビドイツ語講座
モデル会話
Landeskunde (地誌)
自作
- c: Landeskunde
- e: フラッシュカード
OHP

5. 使用中のテキスト：省略

6. その他工夫している教材

独作文，練習問題 (pattern practice)，基本単語表 (300) 語，文法プリント，形容詞の反意語の対照表，雑誌コピー，科学読み物，文学作品・童話，歌，日常目にするドイツ語

7. 学生が native speaker に触れる機会

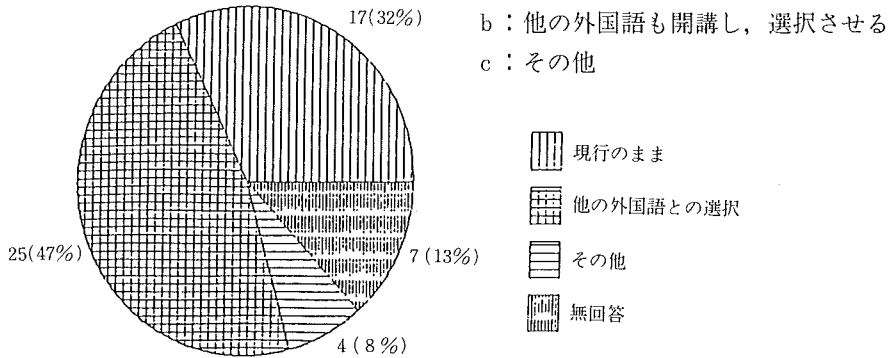
はい：一校

8. その native speaker は専任か非常勤か

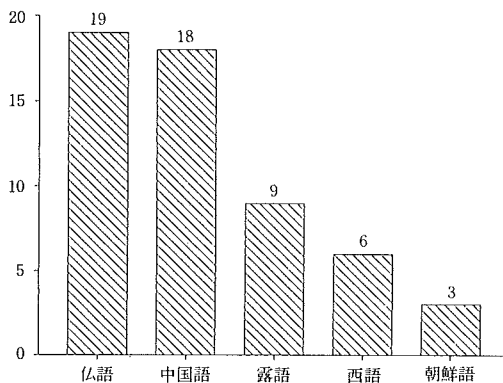
専任

IV. 第2外国語の将来について

1.



注1) bの例



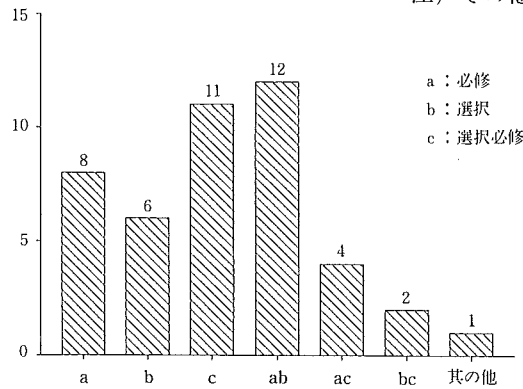
注2) cの例：廃止又は第一・第二の区別をせず英語と選択させる
時間数を増やす

注3) 現行制度としてドイツ語・フランス語・ロシア語のうちから選択させているのが一校ある。

2. 理想的履習形態

a : 必修 b : 選択 c : 選択必修

注) その他: 現行より多くする



V. 自由意見

1. もっと単位数が欲しいが、教育課程全体中では無理だろう。
2. 複数外国語の学習は（国際化の中で）高等教育機関としては重要である。（5名）
3. 重要であると思うが、英語や専門科目との兼ね合いを考えると主張しにくい。
4. 他の外国語も含めて第1外国語として選択させ、20単位を課すと効果が期待できる。
5. 週2時間では語学の授業とは言えず、学生のためを思えば廃止が最善である。
6. 学生の負担を考えれば単位数を削減し、3・4・5年次に選択させるのがよい。
7. 高専の授業形態に合ったテキストがない。
8. 日本の古典を外国語のように位置づけ、しっかりおさえる必要がある。